

「じゃあ」との共起から見た日本語の勧誘文
— 談話構造に着目して —

The Hortative Sentences in Japanese Seen from the Collocation of "jaa"
— Focusing on Discourse Structure —

邢 立 中
XING, Lizhong

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第60号 2025年12月 拠刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.60 2025

「じゃあ」との共起から見た日本語の勧誘文 —談話構造に着目して—

邢 立 中*

1. はじめに

現代日本語学において、勧誘文はモダリティといった文法的カテゴリーの研究の成立や発展とともに注目されてきた。その流れのなかでは、述語形式が重視され、主に「ショウ」「ショウカ」「シナイカ」などの意味や機能に関する研究が中心をしめてきた（樋口1992、安達1995、姫野1998など）。しかし、小説の会話文における勧誘文を調査すると、「じゃあ」「さあ」「ねえ」といった感動詞・接続詞が文頭に共起した例がたくさん見つかる。

- (1) ねえ、あなたも行きましょうよ。
- (2) さあ、行きましょう。
- (3) じゃあ、行きましょう。

これらの勧誘文において、「ショウ」という述語形式が使われている点は共通しているのだが、使われる場面や条件がかなり異なる。(1)のような勧誘文は、話し手が自分の行動の中に聞き手を引き入れようとするものであり、(2)のような勧誘文は、自分と同じ目的に向かって行動しようとしている人に動作のきっかけを与えるものである。このことから、述語形式だけではなく、文頭の要素も勧誘文の意味や機能に強く関わることがわかる。また、述語形式「ショウ」「ショウカ」「シナイカ」は等しく勧誘というモーダルな意味を表しうるのだが、以下のような初対面で話し手にとってあまり親しくない相手に対して、いきなり食事を誘うテクストでは、「ショウ」が使用しにくくなるだろう。

- (4) 「いつも一人で店番しているの？」
「もう一人女の子がいるわ。今は食事に出てるのよ」
「君は？」
「彼女が帰ったら交代するの。」
僕はポケットから煙草を出して火を点け、彼女の作業をしばらく眺めた。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

「ねえ、もしよかつたら一緒に食事しないか？」

彼女は伝票から目を離さずに首を振った。

「一人で食事するのが好きなの」

「僕もそうさ」

「そう？」

(中略)

「じゃあ、何故誘うの？」

「たまには習慣を変えてみたいんだ。」

(風の歌を聴け)

逆に、次のような聞き手の明確な意志表示が前文脈に差し出されるテクストでは、「シナイカ」が使われると、非文になるだろう。

(5) それぞれが会話をはじめ、解散しがたい雰囲気になっている。こういう集団、飲み屋の前で道を塞いで邪魔なんだよなと思ったところで、マサルが声を上げた。

「こんなところで立ち話もなんだから、うちの事務所で飲まない？」

プールで自由時間を与えられた小学生のように、四人の目が輝く。

「えっ、いいの？」

「行こう行こう」

(成瀬は天下を取りにいく)

そのため、勧誘文を研究するにあたっては、文の統語的な構造やテクストとの相互作用をも視野に入れて記述しなければならない。

勧誘文の実例（907例）¹を観察すると、(3)のような「じゃあ」と共起した勧誘文は120例あり、全体の13.23%を占めている。一方、同じく働きかけ文の下位的タイプである命令文や依頼文には、それが目立つほど現れないである（佐藤1992、村上1993を参照²）。これらの事実から、「じゃあ」

¹ 小説の会話の用例を目視によって調査したところ、「ショウ」「ショウカ」「スルカ」「シナイカ」を述語とする勧誘文を907例集めている。本研究で使用する用例は、すべてそれらの小説から選定したものである。引用した小説の詳細については文末の＜用例出典＞を参照されたい。

² 文の統語的な構造に十分に注意しつつ分析を行った佐藤1992・村上1993は「じゃあ」と依頼文・命令文との関係については直接的に言及していないが、取り上げられた膨大な数の実例（佐藤1992では依頼文が399例、村上1993では命令文が402例）を見てみると、「じゃあ」はあまり現れていないのである。佐藤1992は依頼文の文頭に「どうぞ、どうか、ぜひ、くれぐれも」などが、村上1993は命令文の文頭に「おい、やい、こら」などがよく現れることが記述されている。

という接続詞の勧誘文にとっての重要性が窺える。では、(3)のような接続詞の「じゃあ」と共起した勧誘文はどのような特徴を持つのか、「じゃあ」はなぜ勧誘文と密接に関連するのか。そのようなことを明らかにすることが本稿の目的である。

2. 接続詞「じゃあ」

勧誘文と接続詞「じゃあ」との関係を探る前に、少しだけ「じゃあ」の位置付けや特徴について検討しておこう。

高橋 (1994) によると、会話の展開のなかに現れる接続詞は《じぶんうけ》と《あいてうけ》³の二種類に大きく分けられ、《あいてうけ》の接続詞には、「逆接の接続詞」(しかし、でも、など)、「結果・帰結の接続詞」(だから、それで、そこで、など)、「つけくわえの接続詞」(そして、それから、など)、「条件形からきた接続詞」(じゃ、では、それなら、など)の四種類が含まれる。「じゃあ」は《あいてうけ》のなかの「条件形からきた接続詞」に位置付けられている。ただし、高橋 (1994) は「じゃあ」を接続詞の全体の中に位置付けただけで、その意味や機能については詳しく説明していない。

「じゃあ」の本質的な特徴を明らかにしようとした研究としては、浜田 (1991) が挙げられる。浜田 (1991) では、以下のような接続詞を「「デハ」系接続語」(高橋1994での「条件形からきた接続詞」にほぼ対応) と呼んだ上で、「じゃあ」をその代表的なものとして考察している。

デハ、ソレデハ、ナラ、ソレナラ、ソウシタラ、ダッタラ、ソレダッタラ、スルト、ソウスルト

「じゃあ」には以下のような二つの重要な特徴があると浜田 (1991) は指摘している。

- ① 新しい情報の入力があること
- ② 新しい知識と既存の知識との突き合わせによって日常的な意味での「推論」が引き起こされていること

つまり、「じゃあ」は新しい情報の入力に基づいて推論する際に使用する接続詞であると捉えている。浜田 (1991) から一例を引用しておこう。

³ 《あいてうけ》とは「対話のばあいには、話し手のかわりめに、あたらしい話し手のはなしの最初におかれて、あいて（まえの話し手）のはなしとの関係をのべる」用法である。例えば、「<テンプラの話で>「あははは。野菜でも結構おいしいんですけど」「しかし、やっぱり海老がうまい」（禁猟）」のようなものである。一方、《じぶんうけ》は「「社長のお怒りはもっともです。しかし、ほくの身にもなってください。」（鬼畜）」のように一発話のなかでの関係づけがイメージされる」場合である。

(6) 山村「先生あの時どこにいらした」

西村「仕事してました。」

山村「証人は？」

西村「いませんよ。ひとりで原稿書いていたもん。」

山村「じゃ先生にはアリバイがない訳だ。先生か先生の彼女が怪しいことになりましたね。

(『ビ』)

(浜田1991:25)

以上をまとめると、「じゃあ」の働きとしては、①新情報を順接的に受け取ること、②話し手自身による推論が行われること、に注目する必要があるということになる。

3. 「じゃあ」を伴う勧誘文が用いられる談話の構造

3. 1 談話構造のパターン

本節では、勧誘文がどのような談話構造のなかに現れ、先行文とどのような関係を取り結ぶときに、「じゃあ」が使用されるかをみていくことにする。

結論を先取りして言えば、「じゃあ」を伴う勧誘文は、その先行文脈には何らかの新情報が提示されている。それは主に聞き手の発言（一部、場面状況）である。それに基づき、話し手は、どのような提案を行えば、双方あるいは聞き手にとって望ましいかということを推論し、勧誘文を用いて勧誘するのである。次の用例においては、「じゃあ」を伴う勧誘文が二回使用されている。ただし、談話構造のなかで果たす機能が異なる。一回目は提案であるのに対して、二回目は承諾である。

(7) 「ねえワタナベ君、午後の授業あるの」

「ドイツ語と宗教学」

「それすっぽかせない？」

「ドイツ語の方は無理だね。今日はテストがある」

「それ何時に終わる？」

「二時」

「じゃあそのあと町に出て一緒にお酒飲まない？」

「昼の二時から？」僕は訊いた。

「たまにはいいじゃない。あなたすごくボオッとした顔してるし、私と一緒にお酒でも飲んで元気出しなさいよ。私もあなたとお酒飲んで元気になりたいし。ね、いいでしょう？」

「いいよ。じゃあ飲みに行こう」と僕はため息をついて言った。

「二時半に文学部の中庭で待ってるよ」

(ノルウェイの森)

用例を観察すると、「じゃあ」を伴う勧誘文には、「新情報→推論→勧誘」という談話構造が共通にみられ、それらは大きく六つのパターンに分類できる。また、従来勧誘文の研究で重視される述語形式の観点（「ショウ」「ショウカ」「シナイカ」）を付け加えると、以下のようにまとめられる。

表1 談話構造のパターン

パターン	談話構造	述語形式
I	話し手が勧誘の前提条件（聞き手の都合、動作を行う能力、動作に対する態度など）を聞き手に尋ねる → 聞き手が肯定の答えを返す → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文を使って提案する	
II	話し手と聞き手の行動について話し手が提案する → 聞き手が否定的な態度を示す → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で別の提案をする	ショウ
III	話し手と聞き手に共有課題が存在する（または聞き手に課題がある） → 聞き手の意向が導入される → 話し手が聞き手の意向に沿って「じゃあ」を伴う勧誘文で提案する	ショウカ シナイカ
IV	話し手と聞き手が何をするかについて相談する → 合意に向かう → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で行動を具体化して提案する	
V	聞き手から勧誘してくる → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で同意または許可を与える	
VI	話し手と聞き手が行動をともにしようとする → 話し手が実行のタイミングを判断する → 「じゃあ」を伴う勧誘文で動作のきっかけを与える	ショウ ショウカ

上記の六つのパターンは、I～IVとV・VIに大きく分かれる。前者は、いくつかの可能な選択肢から一つの行為を選んで提案するものである。それに対して、後者では、当該行為は所与の候補であり、提案の意味あいはない。述語形式「シナイカ」がIからIVに使えるのに対して、VとVIには使えないということも、提案という性質の有無に関する二グループの違いを裏付けていると思われる。以下、談話構造のパターン別に記述していく。

3.2 パターンI

話し手が聞き手と一緒にしたいことがあり、勧誘文を用いて勧誘しようとするとき、誘いかける前に実行のための前提条件を確認するといったストラテジーがよく用いられる。こうしたストラテジーにおいて、「じゃあ」がしばしば現れる。前提条件には様々なものが含まれるが、典型的なものとして、聞き手の都合や、動作を行う能力、動作に対する聞き手の態度や評価などが挙げられる。（8）では、話し手は「聞き手には二時以降時間がある」という新情報に基づいて、聞き手が自分と一緒に行動をともにできる可能性があることを推論したことを「じゃあ」で表し、聞き手に誘いかけているわけである。（9）（10）についても同様のことが言えよう。

(8) 「ねえワタナベ君、午後の授業あるの」

「ドイツ語と宗教学」

「それすっぽかせない?」

「ドイツ語の方は無理だね。今日はテストがある」

「それ何時に終わる?」

「二時」

「じゃあそのあと町に出て一緒にお酒飲まない?」

「昼の二時から?」僕は訊いた。

「たまにはいいじゃない。あなたすごくボオッとした顔してるし、私と一緒にお酒でも飲んで元気出しなさいよ。私もあなたとお酒飲んで元気になりたいし。ね、いいでしょう?」

「いいよ。じゃあ飲みに行こう」と僕はため息をついて言った。

「二時半に文学部の中庭で待ってるよ」

(ノルウェイの森)

(9) 「え、 なんだ。じゃあ、 急いで用件を片付けないと。広田って、今度の日曜日、暇?」

宝田は少し早口になった。

「暇は暇だけど?」

日曜日は部活の練習も休みだ。遊ぶ約束もない。

「じゃあさ、遊びに行こう」

「遊びに行こうって、俺とお前で?」

「そうだよ」

「そうだよって、二人で行くのかよ」

思いもしない宝田の申し出に、俺の声は大きくなつた。

(おしまいのデート)

(10) 「ねえ、あなた何か昼ご飯食べた? おなかすいていない?」

「すいてますね」と僕は言った。

「じゃあいらっしゃいよ。食堂で一緒にご飯を食べながら話しましょう。食事の時間は終わっちゃつたけど、今行けばまだ何か食べられると思うわ」

彼女は僕の先に立ってすたすた廊下を歩き、階段を下りて一階にある食堂まで行った。

(ノルウェイの森)

話し手は、聞き手から前提条件について肯定的な答えを受け取ることができれば、勧誘の言語行動を前に進めることができる。逆に、前提条件を満たされないことが分かれば、話し手は勧誘という言語行動を中断するだろう。前提条件が満たされなければ、聞き手がそれを実行する可能性は低

いと推論するからである。勧誘という言語行動において、話し手は聞き手とやり取りをしながら、常にその動作の実行可能性を心内で計算し、可能性が高いと推論したときに、「じゃあ」を用いて勧誘するのである。

先行文脈に動作に対する評価や態度を尋ねる場合も同様である。用例を挙げておく。

(11) 「ワタナベ君、どこかこのへんでビリヤードできるところ知らない?」ハツミさんが突然そう言った。

「ビリヤード?」僕はびっくりしていった。

「ハツミさんがビリヤードやるんですか?」

「ええ、私けっこう上手いのよ。あなたどう?」

「四ツ玉ならやることはありますよ。あまり上手くはないけれど」

「じゃ、行きましょう」

我々は近くでビリヤード屋を見つけて中に入った。

(ノルウェイの森)

(12) 「さくらさんが、あれもこれも別にいいと言うのに甘えてましたけど、やっぱり新婚旅行ぐらいい行くべきです」

首をかしげる私に、山田さんはきっぱりと言った。「でも、私、我慢しているわけでも遠慮しているわけでもなくて、本当に行かなくてもいいんですけど……」それが私の正直な気持ちだ。店に迷惑をかけるぐらいなら、行かないほうがよっぽど気が楽だ。

「僕が行きたいんです。桜さんはいやですか?」

「いやではないんですけど」

「じゃあ、行きましょう。旅行代理店が駅前にあったはずだ」

山田さんはすっかりその気で、楽しそうに歩を進めた。

(春、戻る)

さらに、(13) のように、直前のやりとりによって聞き手に動作を行う能力があることを推論して勧誘する場合もある。

(13) 「だいぶ良くなったか?」

「はい、楽になりました」

どうしてだろう。ひねくれ者の私のはずなのに、彼と話していると妙に素直な受け答えをしてしまう。まるで自分じゃないみたいだ。

「そうか、よかった。じゃあ、少し移動しようか」

佐久間さんはほっとしたようにそう言って、地面に座り込んでいる私にすっと手を差し伸べた。

(あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら)

3. 3 パターンⅡ

3. 2で取り上げた勧誘文は、いずれも話し手にとっての望ましさに基づいて勧誘する場面で使用されていた。そこでは、聞き手側の前提条件の確認が重要であり、それが成り立たなければ、勧誘へは決して進めないのだった。

一方、自分たちが対処しなければならない課題があり、その解決のために何らかの行動をとらなければならないといった状況で動作を提案する場合には、ストラテジーは異なってくる。このケースでは、情報を共有したり意見を交換したりしながら、解決法を見出していくプロセスが必要になるからである。

話し手の提案した動作に対して聞き手が否定的な意見や判断を示せば、話し手はその動作の遂行を諦めて、代案を提案しようとするだろう。その場合、「じゃあ」を伴う勧誘文の内容は、聞き手あるいは双方にとって望ましいものである。

(14) 「どうしたら鯖を給食から追放できるかな」

私はつぶやいた。季節に関係なく鯖は給食に登場するんだから、たまたもんじゃない。

「給食のおばさんより先に鯖を買い占めてしまえばいいんじゃないの？」坂戸君が言った。

「そんなお金ないよ」

「じゃあ、鯖を鰯だと思い込んで食べる」

「私そんな想像力無いもん」

「鯖に泳ぎを教えて、捕まえられないように訓練するとか」

「鯖が泳ぎをマスターするまで時間がかかるよ。第一私泳げないし」

「じゃあ、一緒に給食室を襲撃しよう」

坂戸君が過激な提案をした。

「それならできそう」

「できるね。俺たちならね」坂戸君が笑った。

(幸福な食卓)

(15) 七生は小さく「おやすみ」を言ってゆっくりとドアに向かって歩き始めたかと思うと、駆け足で私の真後ろに戻ってきた。

「そうだ、トランプしよ」

「え？」

「いや？」

「いやってこともないけど、どうしたの？」

私は七生のほうを向いて座り直した。

「じゃあ、パズルする？ こないだ隣のおばちゃんにもらったジグソーパズルあったでしょ」

七生は私の質問に答えずに次の提案を始めた。

「だから、どうして今そんなことするのよ」

「じゃあ、しりとりってどう？ 簡単だし、すぐできるよ」

「いやだ。あんな辛気臭いこと」

「じゃあじゃあ、手品見せてあげよっか」

七生の手品はもう何回も見ている。私は顔をしかめて首を振った。

「あー難しいねえ。そしたら、アイスクリーム作ろう。結構面白かったじゃん」

「今から？ 絶対やだ。面倒くさすぎる」

「じゃあ、花火しようよ。夏休みに買ったの、まだ残ってたでしょ？」

どれだけ用意しているのだろう。七生は私に却下されると、すぐに次の案を出してくる。

(卵の緒)

(16) 「どこに行きますか？ 恵比寿に戻りますか」と僕はハツミさんに訊いた。

彼女のアパートは恵比寿にあったからだ。ハツミさんは首を横に振った。

「じゃあ、どこかで一杯飲みますか」

「うん」と彼女は頷いた。

「渋谷」僕は運転手に言った。

ハツミさんは腕組みをして目をつぶり、タクシーの座席の隅によりかかっていた。

(ノルウェイの森)

(17) ——直樹が学校に来やすい環境をみんなで作ってあげよう。

それにはみんな黙ったままでした。ウェルテルのくだらないギャグにつっこみを入れてあげようになった健太くんでさえ、下を向いて黙っていました。ウェルテルは、その様子を、みんなが真剣に考えていると受け取ったのか、満足そうな顔をして、いくつかの案を出し始めた。もしかすると、最初から、生徒に意見を求める気なんてなかったのかもしれません。

——直樹の家に、みんなで授業のノートのコピーを届けよう。

あからさまにイヤそうな、「えー」という声が、数か所から上がりました。

——どうしてそんな態度を取るんだ？ 亮治。

ウェルテルは一番大きな声を出した亮治くんに訊ねました。亮治くんは、しまったという顔をして俯くと、「家が反対方向だから……」と、とっさにしては上手い言い訳をしました。

——じゃあ、みんなでノートのコピーを交代でとって、週に一度、僕と美月で直樹の家に届

ける、っていうことにしないか。

(告白)

(18) 「あ」

七生が小さな声をあげた。

「何？」

私が尋ねると、七生がそっと頸で前を示した。野犬だ。大きな体をした犬が二匹、無気味にゆったりと目の前を動いている。

「うそ、やだ」

私の足は硬くなった。動物が苦手なのだ。苦手じゃなくたって、夜中にあんな野犬を見ればびびる。

「大丈夫。知らん顔して歩けば、何もしてこないよ」

「でも、こっち見てる」

犬は私たちに気づいたらしく、体をこちらのほうへ向けた。

「さあ、行こう」

七生はそう言ったけど、私は怖くて動けなかった。

「無理だよ」

「じゃ、引き返そう」

「もう遅いよ。こっちにきてる」

(卵の緒)

ただし、話し手が状況や聞き手にとっての望ましさを踏まえた上で提案を行っても、聞き手は必ずしも応諾してくれるわけではない（例15、18）。その場合は、さらに代案を提出するか、解決法が見出せないままになるかである。

3. 4 パターンⅢ

話し手と聞き手との間に（あるいは聞き手に）何かの課題があるが、先行文脈で聞き手の事情が明らかになっていて、それを踏まえながら、聞き手が受け入れやすい動作を誘いかける場合がある。この場合、一緒に当該動作を行なうことは聞き手にとっても望ましいことになるだろうと話し手は推論している。

(19) 「今度の土曜日は空いてる？」

「土曜日は何も予定はないけど」と僕は言った。

「じゃあ今度の土曜日で決まりね。で、二人でどこに行きましょう？」

「こいつ、映画が好きやねん」と木樽がえりかに言った。「将来は映画のシナリオを書くのが夢なんや。シナリオ研究会ゆうとこに入ってるねん」

「じゃあ映画でも見に行きましょう。どんな映画がいいかしら？えっと、それは谷村くんが考えておいて。私は恐怖映画だけはダメだけど、それ以外であればそんなものでもつきあうから」

(女のいない男たち)

(20) アパートを出ると、ちゃんと冬を終えて緩んだ風が吹いている。

「あっちは帰ったら、海を見るのもしばらくお預けかな」

「じゃあ、今日は一日見ていこうぜ」

軽トラに荷物を積み終えた私達は、荷台に登り、最後に海を眺めた。

(図書館の神様)

(19) (20) は聞き手の事情を考慮に入れた上で、勧誘しているのだが、(21) (22) (23) は聞き手の希望を聞き取った上でそれを実現すべく勧誘文を使用している。

(21) 「もっと遅らせておいたらよかったですのにな」

最後に佐菜ちゃんはそうつぶやいた。

「え？」

「時計。もっともっと遅らせちゃえばいいのにね。そしたら、また深雪さんと豪遊できるのに」

「そうだね。じゃあ、今度は一時間くらい遅らせておいて、海外にでも豪遊しようか」

私がそう言うと、佐菜ちゃんは嬉しそうに手を振った。

(優しい音楽)

(22) 「見たことないの」

「うん。このあたりの動物園にいる？」

文がインターネットで調べてくれた結果、電車で一時間程度の動物園にパンダがいることがわかった。でも、大人のパンダで、ニュースでやっている子パンダではない。

「それでもいいから見たい。パンダパンダパパーダ」

(略)

「じゃあ、いこうか」

(流浪の月)

(23) その時、養護の先生が保健室に戻って来た。「あの……」と控えめな声が入り口の方からベッドのこころに聞こえる。

「伊田先生が安西さんに会いに来ると言っていますけど……」

こころは目を閉じた。ぎゅっと強く閉じ、次に開けた時、気持ちが少し強くなった気がした。

こころを見つめる喜多嶋先生の顔を、見つめ返す。

「一家に帰りたいです」

こころの言葉に、喜多嶋先生が頷いた。

「じゃあ、そうしようか」

(かがみの孤城)

なお、(22) と (23) の先行文脈の「それでもいいから見たい。パンダパンダパパーダ」「家に帰りたいです」は単に希望を述べているだけなら、パターンⅢにとどまるが、自分の希望を述べることを通して間接的に話し手に働きかけているとすれば、後でみるパターンⅤに近いといえる。あるいは、パターンⅢとパターンⅤの中間に位置付けてもよい。(23) では、「じゃあ」を伴う勧誘文は話し手のプランではなく、聞き手の意向の表明に対して、<同意><許可>を与えるものである。このタイプの形式上の特徴として、「そうしようか」のように、相手の意向の内容を指示示す指示代名詞が現れることがある。この点でもパターンⅤと変わらない。

3. 5 パターンⅣ

勧誘文の先行文脈で、会話の参加者の間である課題をめぐってやりとり（話し合い）が行われた結果、ある程度、意見がまとまっている場合がある。話し手は、合意内容を汲みながら、「じゃあ」を伴う勧誘文を用い、その場にいる人々を代表して、行動を選択し、提案する。このタイプでは、「じゃあ」の前に「よし」がよく現れる。

(24) ヨキも、おしゃべりが癪に障ったらしい。

「ええい、うじゃうじゃ言つとる暇に、もう一度探してこようやないか！」と、憤然と立ちあがった。

「ご迷惑をおかけします」

清一さんが両手を畳につき、頭を下げた。「みんなの力を貸してください」

座敷が静まり返る。好き勝手にしゃべっていた村人は、気まずげに顔を見合させ、「そやな、探しにいこ」「おやかたさん、やめておくれやっさ、水臭い」などと言って、腰を上げた。

「ようし」とヨキが張り切りだす。「じゃあ、くまなく村を探してまわるよう、班分けしよや」

「待ちねいな」しづがれた声が発された。

(神去なあなあ日常)

(25) 「みんなそれぞれ作れるものを作るってどう？ そうすれば三品出来上がるし」

私の提案に、「楽しそうですね。僕、目玉焼きなら作れます」と山田さんが賛成した。

「じゃあ、私はスパゲティを作ろうかな。と言っても、パスタをゆでてレトルトのミートソースかけるだけだけだよ」

「よくそれで作るって言うな」

「そう言うおにいさんは？」

「そうだなあ……」

おにいさんはもう一度冷蔵庫を眺めると、冷凍しておいたご飯を取り出した。どうやらチャーハンを作ることに決めたようだ。

「よし、じゃあ、みんなで取りかかりましょう」

私は景気よく言ったけど、おにいさんと二人ですら身動きできない台所に三人もいるとなると、狭苦しさと言つたらなかつた。

(春、戻る)

「よし、じゃあ」を伴う勧誘文の述語形式は<ショウ>で終わることが圧倒的に多いが、<スルコトニショウ>という分析的な形式が現れることもよくある。このような述語形式の使い分けは、動作実行のタイミングと関係があると考えられる。「ショウ」で終わる文は発話時からやや間をおいて発話現場で動作を実行する傾向があるのに対し、<スルコトニショウ>は動作の実行に対する二人の意思決定を述べるだけで、その場での実行を必ずしも意味しない。

(26) 「そうか。じゃあ、今度の休みに実家にでも行こうか」

「それはやっておこうかな。でも、最初にどっちの実家に行く？」

はな子が眉をしかめた。確かにそれは難しい問題だ。

「そりゃ俺の方からだろう。お前の家の父ちゃん怖そうだしさ、とりあえず後回しにしよう」

「えー。章太郎の家なんか、おばあちゃんに弟さんまでいるじゃない。人数多い分、大変だつて」

「よし、じゃあここは平等に、じゃけんで勝った方の実家から行くことにしよう」

「賛成。あ、それなら、じゃんけんゲーム機械があったんだった。あれなら正しくじゃんけんできるからね。よし、ちょっと待ってて」

(優しい音楽)

(27) 「歩きすぎて、足が痛くなっちゃった」

「ずいぶん買ったからな」

「これだけ買えば、一ヶ月くらい買い物に行かなくてもいいんじゃない」

「よし、じゃあ、これからは一ヶ月に一回、ダイエイでデートすることにしよう」

通彦がそう笑った。

(強運の持ち主)

3. 6 パターンV

パターンⅢの一部に連続するのだが、先行文脈で相手から提案が出され、後続する＜じゃア、～ショウ（カ）＞の文がそれに対する＜同意・許可＞として働くものがある。

(28) 「文くん、今日はお仕事休みでしょう。一緒にご飯食べよう」

「今日はひとりで本を読みたいんだ」

「読めばいいよ。私はアニメ観るから」

「ひとりで、という部分については？」

「みんな、それぞれ、ひとりで、好きなことしよう。同じ部屋で」

梨花ちゃんの言葉に、文は少し考えたあと、じゃあそうしようと立ち上がった。

(流浪の月)

ただし、相手からの働きかけに対する単なる応答としてなら、接続詞「じゃあ」の共起は必須ではない。例えば、

(29) 「みんな、それぞれ、ひとりで、好きなことしよう」

「そうしよう」

(作例)

(30) 「俺は、暁海と、花火が、観たい」

「そうしましょう」

(汝、星のごとく)

のように単純な受け答えの場合は「じゃあ」がないのがふつうである。「じゃあ」はあくまでも「推論」の介在を意味するのであって、(28) のような例でも、いろいろとやりとりをした上で、これなら問題がないと推論されるということを「じゃあ」が表している。

3. 7 パターンVI

行動をともにしている人たちがスケジュールを共有しているとき、そのうちの一人が実行のタイミングを捉えて、動作を促すことがある。この場合、述語形式としては＜ショウ＞＜ショウカ＞がよく現れる。

(31) ようやく気配を察した香具矢が、馬締を振り仰いで笑顔になった。

「考えごとは終わった？」

「はい、すみませんでした」

「ん。じゃ、行こうか」

馬締は驚いた。香具矢の中で、後楽園へ行く話がまだ進行中だったこと。馬締の考えごとが終わるのを、香具矢が待ってくれていたらしいこと。意外の念に打たれすぎて、馬締はうれしいというよりも呆然としてしまった。

(舟を編む)

(32) 「橋口さんから……」

小さく呟いて、スマホを俺のほうに向けてきた。ラインのトーク画面が映っている。

「見ていいの？」

「うん」

最新の吹き出しを見て、俺は思わず声を上げた。

「えっ、有川さんも来れないの？」

「家の用事が急に入っちゃったって……」

「そっか、しょうがないよな」

「うん」

彼女は慣れない手つきで画面をタップし、橋口さんに返信をはじめた。

てことは、と気がついてしまう。今日は加納さんとふたりきり？ うわ、マジで？ どうしよう……。

丘の上の公園では、ほんの三十分ほど並んで話しただけだった。学校で話すときもせいぜい五分か十分くらい。でも今日は、調べものをするのだから何時間も一緒にいることになる。俺の心臓、耐えられるかな。

加納さんがスマホをしまって、俺を見た。

「じゃ、行こっか」

さらりと行って、平然と歩き出す。さすがだ。

(あの星が降る丘で君とまた出会いたい)

(33) そろそろスタート地点に集合する時間だ。

「行こう」と清瀬はあっさり言った。

「円陣を組んで気合いを入れたりしないのか？」

とキングがそわそわして尋ねる。

「したいのか？」

「いや、まあ……」

キングは言葉を濁した。テレビカメラを意識し、なにかしないとさまにならないのではない
かと、気を揉んでいるのだ。清瀬はキングの意を汲み、
「箱根の山は天下の險」
と言った。「じゃ、行こう」
さっさと歩いていく清瀬は、いつも通りの冷静さだ。

(風が強く吹いている)

(34) 泉さんが時計を見て、私たちに声をかけた。

「じゃ、朝礼しようか」
「はーい」
三人が並んで整列し、朝礼が始まる。

(コンビニ人間)

このパターンでは、「じゃあ」のほかに「では」もよく現れる。

(35) 辞書の編纂に終わりはない。希望を乗せ、大海原をゆく舟の航路に果てはない。

「では、今夜ばかりはせいぜい飲むとしましょう」
泡があふれるよう注意しながら、荒木のコップにビールをついだ。

(舟を編む)

「じゃあ」は「では」の縮約形であり、私的な会話で使用される。一方、「では」は書き言葉や公的な場面や会合などで使用される。「では」が勧誘文と共に起るのはこのパターンVIだけであり、パターンI～Vの用例には「では」は観察できなかった。

4. おわりに

勧誘文による勧誘では、自分と同じ動作を相手に働きかけるため、話し手と聞き手の意向が一致しなければ、現実には成り立たない。そのため、勧誘という言語行動においては、話し手は常に聞き手の反応や状況の変化を敏感に観察しながら、話し手と聞き手の意向の一致点を探さなければならない。上位の人から下位の人への発話を除けば、相手との意向の対立を避けながら、話し手と聞き手の双方にとって望ましい方向へと談話を展開するのが一般的だと思われる。一方、「じゃあ」は、新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的な反応であるとすれば、聞き手の意見や意向に敏感に反応することは、勧誘文の内在的な性質と合致していると言える。以上が、命令文や依頼文よりもはるかに高い割合で「じゃあ」が勧誘文と共に起する理由であると考えられる。

参考文献：

- 安達太郎 (1995) 「シナイカとショウとショウカ一勧誘文一」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版, pp.226-234
- 安達太郎 (2002) 「第1章 意志・勧誘のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, pp.18-41
- 邢 立中 (2024) 「勧誘文の類型化をめぐってー「さあ」「ねえ」との共起を中心にー」『2024年度日本語学会秋季大会予稿集』2024年10月
- 甲田直美 (2000) 「接続詞と対話」『国語語彙史の研究 十九』和泉書院, pp.255-272
- 佐藤里美 (1992) 「依頼文一してくれ, してくださいー」『ことばの科学5』言語学研究会編, むぎ書房, pp.109-174
- 高橋太郎 (1994) 「会話の展開のなかでの接続詞」『立正大学文学部論叢』99, pp.1-19
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4第8部モダリティ』くろしお出版
- 浜田麻里 (1991) 「「デハ」の機能：推論と接続語」『阪大日本語研究』3, pp.25-44
- 林 淳子 (2020) 『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 樋口文彦 (1992) 「勧誘文一しよう, しましょうー」『ことばの科学5』言語学研究会編, むぎ書房, pp.175-186
- 姫野伴子 (1998) 「勧誘表現の位置ー「しよう」「しようか」「しないか」ー」『日本語教育』96, pp.132-142
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現ー疑いと確認要求ー』ひつじ書房
- 宮崎和人 (2009) 「談話における意志の形成」『岡山大学文学部紀要』52号, pp.113-126
- 宮崎和人 (2020) 「第4章 モダリティ」『現代語文法概説』朝倉書店, pp.36-54
- 村上三寿 (1993) 「命令文一しろ, しなさいー」『ことばの科学6』言語学研究会編, むぎ書房, pp.67-115

＜用例出典＞

- 汐見夏衛 『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら』『あの星が降る丘で、君とまた出会いたい』 /瀬尾まいこ 『おしまいのデート』『強運の持ち主』『幸福な食卓』『卵の緒』『図書館の神様』『春、戻る』『優しい音楽』 /辻村深月 『かがみの孤城』 /凧良ゆう 『汝、星のごとく』『流浪の月』 /三浦しをん 『風が強く吹いている』『神去なあなあ日常』『舟を編む』 /湊かなえ 『告白』 /宮島美奈『成瀬は天下を取りにいく』 /村上春樹 『女のいない男たち』『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』 /村

田沙耶香 『コンビニ人間』

[付記] 本稿は、日本言語学会第170回大会（2025年6月28日・明海大学）において行った研究発表の内容をまとめなおしたものである。席上、貴重なコメントをくださった方々に感謝申し上げる。